



学ぶ目的をもち、生きて働く知識を生み出す

校長 五十嵐 俊子

先月、本校と南大谷小学校、南大谷中学校の3校の教員が集まり、SDGsの理念と実践を学ぶ合同の研修会を開きました。講師としてお呼びした先生は、高等教育の授業改革に取り組まれている生物の先生です。次のお話が印象的でした。「JICAの仕事でブータンに行ったとき、現地の子どもたちが何のために勉強するのかという意識をしっかりとって勉強していたことに驚いた。海外の大学に行って、自分の国の幸せの為に何かしたいと目を輝かせながら夢を語っていた。彼らは簡単に英語をしゃべっている。日本では頑張って教育をしてもほとんどしゃべれない。日本も、子供たちがもっと自立して自発的に学ぶように本当に教育を変えないといけないと感じた。」



5年前、私もシアトルで開催された世界規模の研修に参加させていただいた折に、小学校から高等学校までの学校を訪問する機会を得ました。校種を越えて共通していたのは、教師の講義中心の授業から子供主体の授業への変革を目指していたことです。ICTを活用したり、プロジェクト学習や探究学習を重視したりして教育の変革に挑戦していました。子供たちはとてもパワフルで、今こんな勉強をしているのだと何人もアピールしに来ました。また、質問すると、どのクラスでも子供たちが誇らしげに説明してくれます。進んでコミュニケーションを図ろうとする積極性に圧倒され、日本の子供たちは、将来、このような世界の仲間と一緒にあったプロジェクトの場で、自分を十分に発揮できるだろうかと感じた記憶があります。



今、多くの国がテクノロジーを導入したり、プロジェクト学習や探究学習を導入したりして学びの変革を図ろうとしています。先月は、町五小に、Google主催の国際的なイベントで講演された世界各国（アメリカ・カナダ・ブラジル・メキシコ・オーストラリア・ニュージーランド・イギリス・スウェーデン）のお客さまが本校の視察に来られ、本校の学びの姿を見ていただきました。日本の伝統をテーマにした授業やICTを活用した対話の授業に感心されていました。給食時には、少し控えめながらも優しくおもてなししようと働きかけている子供たちに、微笑みながら応えていただきました。後日、「Your school is wonderful and you have so sweet children!」と、子供たちのことを褒めたお礼のメールをいただいて、大変にうれしく誇りに思いました。（視察の様子はWebサイトに掲載しています）

これからの学校は「知識を覚える場」ではなく、「知識を様々な場面でどんどん使い、それによって新しい知識を自分で発見して得ていく場」となります。子供自身が自分の弱いところや克服すべき課題を理解し、自ら学びを工夫できる自立的な学び手となるように育てていきたいと思えます。本校では自分の考えをしっかりともち、ICT等のツールを活用した対話や協働的な探究学習を取り入れています。他人と協力して行動する「協働的な探究学習」は、グローバル化が進む社会の中で一層大切になると考えます。今より少しレベルの高いところへ上がっていけるように十分に挑戦できる環境を整えて支えることが大人の役割です。努力したプロセスを褒めて、学び続ける意欲を子供たちに与えたいと思えます。

認知心理学の視点から言うと、知識は、体の一部になってこそ生きて使えるようになるそうです。使うことのできる知識（生きて働く知識）は、事実の断片的な記憶の集積ではなく、知識をいかに使うかという手続きそのものの記憶と切り離せない形で脳内に存在するそうです。今、全学年で、生活科や総合的な学習の時間「まちご エンジョイ ラーニング」で協働的な探究学習を行っています。さらに今週は5年生の川上村移動教室、来週は4年生の避難所体験学習を行います。これらの貴重な体験が、学んだ知識を生きて働く知識にしてくれることでしょう。日々の学習と体験を結び付け、主体的に学びに向かう町五の子を育てます。